



やす

IYASU

リビングウィル 自分の意思が医療チームに伝えられない場合に備え、人工呼吸器、胃ろうなどの人工的な栄養補給、人工透析などを受けるかどうかについて、書面で希望を記しておくこと。選択肢や自由筆記など様々な形式がある。医療チーム、家族が患者の意思を推定する有力な材料になる。

### 医薬分業の穴

東京都江戸川区  
主婦 宇田川真理子 59  
この夏のお盆のこと。母が医院での診察の予約をいれた日、いつも使っている

### わたしの医見

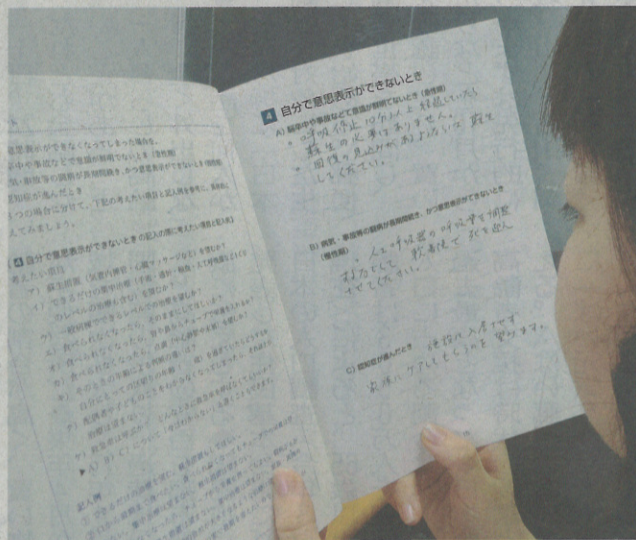
回復不能な病気や突然の事故で、自分の意思が医療チームに伝えられない場合に備え、延命措置の希望を記すリビングウィル(生前意思)。今年6月に発表された国の調査では、約7割が考え方に賛成と回答し、関心は高い。ただ、実際に書いている人は3%と少ない。リビングウィルはどのような心構えで書けばいいのか。(渡辺理雄)

## リビングウィル 書く心構え

「母のように生きたい」と思い、延命措置に対する考えを書き記しました」  
東京都在住の細井淳子さん(50歳代)はリビングウィルを書いた動機を話す。  
細井さんの母は2005年12月、胃がんで亡くなった。78歳だった。同年5月、がんが分かった時は周りの組織に広がり、手術が出来ない状態だった。余命は3か月と説明された。

歯科医だった母には、孫に当たる高校3年生の細井さんの娘の医学部合格を見届けたという強い思いがあった。抗がん剤治療を受

# 延命措置に「生き方」反映



リビングウィルを書く「私の生き方連絡ノート」。左ページの例を見て右ページに書き進める。ノートは書店などで販売されている

けた。半年後の11月、推薦入試の合格を孫娘から聞かされた時は、やせた手に点滴のスタンドを持って駆け寄り、喜びを分かち合った。

「その1か月後、付き添っていた私に『もういいかしら。幸せだったわ』と告げ、母は亡くなりました。近い親戚を病室に呼び、お別れをした後でした」

「生きる」とは何かを母に教えてもらった、と細井さん。意識不明で寝たきりになったり、認知症が進んで食べられなくなったりした時は、「生きる」ことにならなから延命措置は中止してほしい、と話す。

「私は、食べるのが大好きだから胃ろうも付けないで、と希望として書きました。家族とも話しています」リビングウィルは、人工

呼吸器、人工透析、心臓マッサージなど、延命措置の希望を記す。ある程度の医療知識は必要だが、自分の価値観や生き方を明確にすることがより大切だ。

医師、看護師などで作る「自分らしい『生き』『死』」を考える会」代表の渡辺敏恵さん(東京女子医大非常勤講師)は「ピアニストから『ピアノが弾けるようになるなら苦しい治療でも受けるが、難しいようなら緩和ケアで』という意思を伝えられたことがありました。生き方が明確なら、受けた治療や避けたい治療について、自然に考えが導き出されます」と話す。

同会は10年、大切にしていること、自分が望む医療などについて記入する「私の生き方連絡ノート」(4

60円、税別)を発行、書店などで販売している。人工呼吸器の装着や胃ろうの造設などの個々の延命治療の希望を「はい」「いいえ」の選択肢で示す形式のリビングウィルとは違い、同会のノートは記入例を参考に、自由に書く形になっている。

「いざ書こうとすると様々な疑問が浮かんできます。そうした疑問は、家族やかかりつけ医に尋ねてみてください。理解が深まる助けになります。話し合いを通じて考えを共有してくれるようになった家族などからは、いざという時に自分に代わって判断してくれる代理人を選んでおくといいでしょ」と渡辺さん。

北里研究所病院(東京都港区)が開くリビングウィル作成のためのセミナーで、講師を務めている総合内科医師の竹下啓さんも、こうアドバイスする。

「延命治療ごとの是非が分からないなら、その部分は書かずに空白でもいいです。それより『苦痛なく穏やかに』など大体のイメージや根本にある価値観を書き添えておく、万一の際に家族や医師が対応を決めるのに役立ちます」

それほど堅苦しく考えなくてもいい。まずはイメージから始めてみてはどうだろうか。

薬局は休みだった。高齢の母を待合室に残し、母の処方箋を手に、じりじりするような炎天下で薬局を探し回った。2軒はお休みで、そのほかの2軒は母の薬を扱っていなかった。残りの1軒では、母がお薬手帳を持ってくるのを忘れたため、薬を特定できなかった。結局、家族に連絡して薬の名前を特定し、隣の薬局で手に入れることはできたが、医薬分業の思わぬ落とし穴を知った。

すべての薬をそろえることはできないとは思って、  
「どこの処方箋でも受け付ける」という薬局の文字がうらめしく思えた。

### 心の診療感じた

千葉市緑区

無職 和田盛行 76

休日の夜中、妻が高熱を出し、救急車を呼んだ。近くにあるかかりつけの病院で引き受けてくれた。待機していた当直医と、ベテランの看護師が点滴などをしてくれ、事なきを得た。

いったん帰宅したが、今度は胸の痛みを訴えた。このため、私の車で再度、この病院を訪ねた。様々な検査の結果、細菌の侵入が原因と判明。一晩に2回も面倒をかけたのに、ベテラン看護師は、熱帯夜の院内の廊下を走り回り、妻を介抱してくれられた。肉親をいたわるように、優しい笑顔で接してくれた。心の診療を感じながら、早朝の帰り際、車が見えなくなるまで見送ってくれた姿は、医療に携わる者のかがみのように見えた。